

ラットサイン(新田次郎著)

編集委員会

東京都害虫防除協同組合の機関誌「都虫協だより」第8号(昭和49年9月1日発行)に「新田次郎氏のラットサインを読んで」という記事がありました。

大変興味深い内容でしたので、ご紹介します。なお本著は「犬糞(いぬぞり)使いの神様」の著作の中に掲載されており、アマゾンで購入することができます。

編集後記(筆者：森田 実)にある記事を転載します。

山岳小説のジャンルで特異なファン層を持っている新田次郎氏が、文芸春秋の七月特別号で、恐らく我々PCO業者を小説として扱ったのは始めてではないかと思われる“ラットサイン”という題名にて、ネズミ駆除の専門会社の営業及び防除活動を書いています。

此の種の仕事の内容が、如何に大変なものであるか、又作業員の中でも、良く訓練され経験を積んだ者達により、極めて組織的、事務的に仕事を処理していく過程がリアルに、小気味良く描かれており、我々に改めて、プロとしての誇りを持たせてくれます。皮肉な事に外観は大層清潔そうな一流レストラン、食堂、スナック等も、内部ではゴキブリやネズミの横行に任せている様子も描写されていて、我々が良く経験する事です。又、PCO業者と直接、接触する食堂、レストラン等の支配人、主人、コック長、主任等の我々業者に対する、職業の社会的位置づけも、新田氏がさりげなく取り上げているのが、我々に充分

汲み取る事が出来ます。

業界でのネズミ駆除マニュアルの理想的なステップを、此の小説中の業者は行っていきますし、ラットサインにかける我々業者の意気込みを、大衆に分り易く説明している事でも彼に感謝したい気持ちになります。

今後も、PCO業者の活躍を扱った小説が数多く出版される事を期待しますし、新田次郎氏の健闘を祈っております。

「ラットサイン」の要約

かなり名の通った食堂の調理場でラットサインを見て、「はじめて見た人には、くわしく説明されても、これがねえ、と首をかしげるような、見かけ上、不明瞭な痕跡であった。ラットサイン—それはネズミ駆除の唯一の手蔓であった」。

ネズミ駆除会社の営業部員は様子からみて、「こいつは三桁の中だな」という推定数字が頭に浮かんだ。数百匹はいるだろうということだ。

食堂の主任さんは、「ネズミ屋さん、あなたの商売も大変ですねえ」と言った。主任さんにそのような呼び方をされるのはまことに迷惑であった。

調理場の電灯を消し、しばらくして電灯をつけると、主任さんが悲鳴をあげた。調理場いっばいに群がっているネズミを見たのである。

営業部員は持ってきたカバンから袋を取り出し、両手にそれぞれ1匹ずつネズミを捕らえて携げていた。手をつかみ取ったのだ。「それ

を持ち帰って会社の研究所で解剖して胃の内容物や寄生虫を検査します。契約が結ばれば改めて調査部員が来てもっとくわしく調べて駆除作業が始まります」と言った。

社内の作戦会議の結果、「まず、外部と通ずる穴を全部封鎖する。次に食堂側の協力を得て、食べ残しを完全に始末し、材料はそれぞれ収容箱に入れてもらう。推定500匹もいるネズミを捕るには、まず、鳥もち作戦を行って大量に捕捉してから残余については、彼らを飢えさせてから、殺鼠剤作戦又は捕鼠器使用作戦を併用する。作戦完了は2週間」と決定した。

駆除作戦の結果、1晩で200匹捕獲したが、ロッカーに置かれた鳥もちに大きなネズミが引っ掛かっていて無残な姿で死んでいるのを女店員が見つめて悲鳴を上げた。この食堂にネズミがいるのは、自分たちのせいではないと言いたいような口ぶりで文句を言うのであった。営業部員はそのお叱りにこやかに応えながらやりきれない思いを感じた。

次の現場も食堂の調理室だった。床はぴかぴかにみがき上げられ、調理台の上には1点の汚れもなかった。食堂の班長が「この調理場にネズミがいるのです」と言って齧られたニンジンを持ってきたところ、営業部員は即座に「ドブネズミの親ですね」と答えた。歯型でわかる

のだ。

班長は「2匹いるのです」と自信ありげに言った。

社内作戦会議の結果、夜間ラットサイン発見用の粉を散布して、翌朝早く行って、調査することとなった。

作業当日、調理場を中心として付近いったいに散布した粉の上にネズミはラットサインを残した。早朝にやってきた作業員は、ラットサインの跡を追って、ネズミのひそんでいるところを発見した。彼らはその周囲に捕獲ネットを張ってから、品物を一つずつ運び出した。食糧の箱に隠れていたネズミはどうとう追い出され、2匹のネズミがネットに掛かった。班長は「私たちは、消毒会社のお陰で、清潔なものをお客様に出すことができます」と礼を言った。彼は人知れず満足感に浸った。

後日友人とバツタリ会い、食事をする事になって行ったのが3桁のネズミがいる食堂だった。さすがに食事は頼む気になれずミルクを注文した。友人は、「ここは清潔でとてもうまい」と言った。営業部員は心の中でばかばかしいとつぶやいていた。

犬糞使いの神様 新田次郎著 文春文庫
1979年刊 定価280円